《開成まちづくり協議会　生活・環境部会からのお知らせ》

まちづくり講座　行ってみたいな　よその国　－カリブの夢－

を開催しました。　セントルシアに思いを馳せてください！

【はじめに】

９月１２日(火)、元シニア海外協力隊（公益財団法人）佐賀県国際交流協会 理事長 黒岩春地 氏によるまちづくり講座を開催しました。黒岩氏は、佐賀県庁を２０１６年に退職後、ジャイカのシニアボランティアに応募され、駒ケ根青年海外教育隊訓練所(長野県)で派遣前訓練として、語学訓練や現地で課題を見つけ解決策を提案する実践的訓練などを経て、同年１０月から２年間セントルシアで活動されています。

黒岩氏がセントルシアで自己のミッションとして「カリブの夢」の実現に取り組んでいく過程で経験され、気づかれた様々な出来事を丁寧に話されました。初めて聞くセントルシアという島国のこと、生き生きとした人々の暮らしぶり、そしてカリブの夢と称される目が不自由な人たちの自立支援を目指す指圧研修センターの構想策定から現在までの様々な出来事に聞き入ってしまいました。

その中から印象深かったことをまとめましたので、どうぞご覧ください。そして、遥かかなたのセントルシアという島国に思いを馳せていただき、自分なりにできることを考えてくだされば幸いです。それでは、「カリブの夢」物語の始まりです。

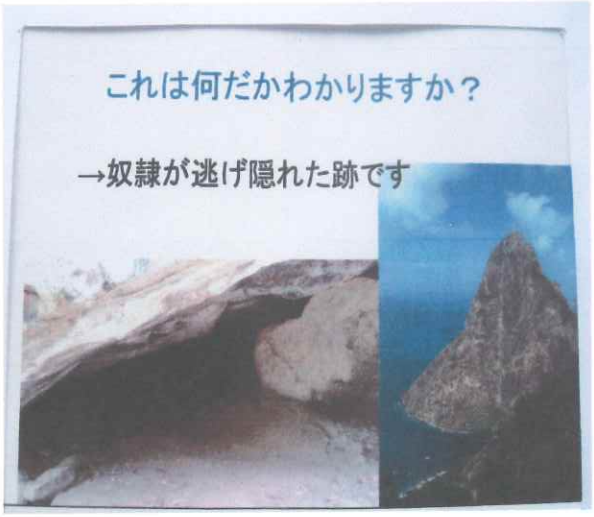
「カリブの夢」についてお話します

セントルシアに興味深々な参加者

【セントルシアについて】

カリブ海には１２の島があるが、その一つがセントルシア。人口１８万人、首都はカストリーズで言語は英語、佐賀県の１／４程度の面積しかないがそれでもちゃんとした国である。映画パイレーツ・オブ・カリビアンの舞台となったカリブ海にあって，フランスとイギリスが交互に統治した歴史がある。統治下時代はプランテーション農園のサトウキビ畑が広がり、砂糖が製造されていた。

プランテーション農園では、労働力としてアフリカから連れてこられた人たちが奴隷として働かされていた。過酷な労働から逃亡した奴隷が隠れていた穴がピトン山に残っており、急峻な山なので農園主は追ってこなかった。そういう悲しく痛ましい歴史が残っている島、セントルシア。人々は故郷であるアフリカへの強いあこがれがあり、祭りの衣装などはアフリカそのものである。



▲島の南西部に並ぶ世界遺産のピトン。双子のとんがり山の絶景▲

▲映画の撮影で使用された海賊船、今は観光船▲▲砂糖製造の朽ちた機械が歴史を物語る▲

▲ジャイカの協力事業。海に杭を立て、張ったロープに藻を養殖して欧米に輸出している▲

【カリブの夢について】《指圧研修センター構想策定 ～ 視覚障害者協会の突然の閉鎖》

現地の教育事情や目が不自由な人たちの仕事に関する状況などについて話したい。

セントルシアに派遣される前、駒ケ根青年海外教育隊訓練所でジャイカから「現地の人たちの自立支援」というミッションが課せられた。技術屋でない自分にできることは何かないか、実現可能な取り組みを幾つか、例えばコールセンター業務などを考えていた。

セントルシアに赴任し、視覚障害者協会でアブリル会長をはじめ目が不自由な人たちと一緒に仕事をしていく中で、彼らの生活ぶりを見ていて、全盲の多くの方々が家に閉じこもっており、仕事する機会・場がないことに気づいた。とりわけ人口１８万人に対し全盲の方が２，０００人もいて、人口に占める全盲者があまりにも多いことから、研究に乗り出した大学があるほどだ。

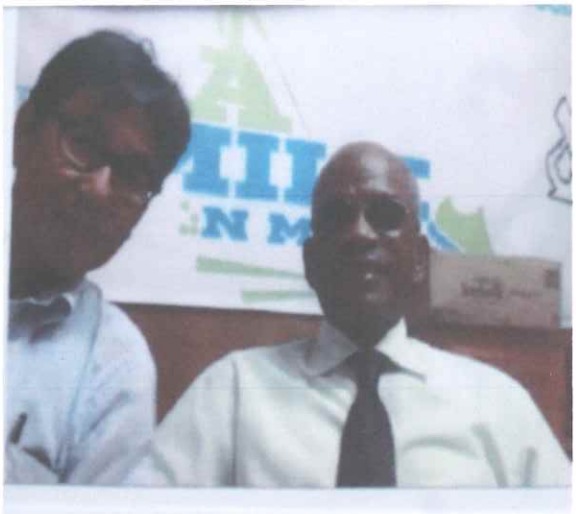
また、この国では、統合教育が行われており目が不自由な子供も同じ教室で勉強している。教育制度としての統合教育ではないが、実態として統合教育となっており、裕福な家庭の子供は目が不自由でも学校で教育を受けている。しかし、多くの子供たちは学校に行きたくても行けない現実がある。統合教育よりも目が不自由な子供たちのための学校に行きたいと願っている。

このような状況を見て、彼らが自立して生きていけるには何が必要か、現地で実現可能なことは何なのか、いろんな方に相談し検討した結果、視覚障害者のための「指圧研修センター」を立ち上げることを「カリブの夢」として、この実現を目指すことにした。

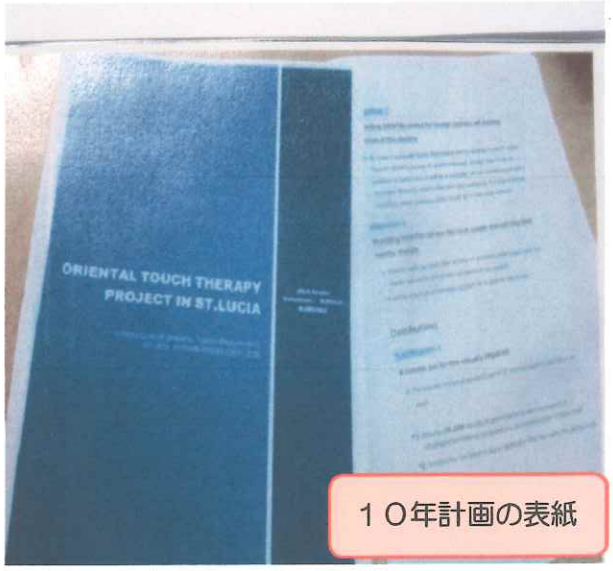
統合教育の教室

点字習い

▲視覚障害者協会が入る建物▲



▲視覚障害者協会のアブリル会長▲



１０年計画の表紙

指圧研修センターの発想は、タイ式マッサージが広く知られており、マッサージを受けにタイに行く観光客がいるほどタイの魅力になっていること。セントルシアには１０月から４月にかけて大型客船が入港しており、マッサージの需要もあるだろう。そういう観光客にセントルシア式マッサージというものを提供できれば素晴らしいことだ。もともとセントルシアには指圧という発想はないが、人の体に触れる指圧がお金になれば視覚障害者の自立支援につながってくる。
目が不自由な人たちの働く場になる。そういう夢の実現に向けたアクションプランを１０年計画(正式名称は、オリエンタル タッチ セラピー プロジェクト)として策定した。その骨子だが、指圧研修センターの設立までの年次計画であり、１０年目にはカリブ諸国の実習生用寄宿舎建設まで掲げている。この１０年計画に対する理解と支援をお願いする活動をジャイカ事務所など広く展開した。お金の支援はできないが、人的支援はできるとの回答だった。

そのようなとき、突然「視覚障害者協会が３か月以内に閉鎖」いうニュースが流れた。そうなるかも知れないと予想していたが、指圧研修センターどころではなくなった。

▲閉鎖への残念な思いを語られる黒岩氏▲

▲視覚障害者協会の閉鎖を伝える報道▲

【カリブの夢について】《視覚障害者協会存続に向けた活動 ～帰国》

何とか視覚障害者協会が閉鎖されないよう考えを巡らせていたが、５年前にニカラグア東洋医学大学に目が不自由な人たちのために指圧講座が開設されていることが分かった。この大学を創設した八巻学長から見に来ないかと誘われていたので、スペイン語を勉強し、傷心の思いのままニカラグアに行った。また、縁は異なものでニカラグアのジャイカ事務所長は元佐賀県職員の高田氏でよく知っていたので、彼の宿舎にお世話になりながら大学を訪問し、いろいろと調べたところ、東洋医学や西洋医学並みの教育内容だった。

ニカラグア東洋医学大学で指圧講座を教えていたのが網川さん。網川さんは全盲で日本の盲学校を退職されニカラグアで教えられていた。私がニカラグア訪問時には既に帰国されていたが、「セントルシアの視覚障害者の自立支援のため将来指圧研修センターを手伝ってもらえないか」とお願いしたところ、「応援したい」との返事だった。

網川章先生の教え子が開いた施術所

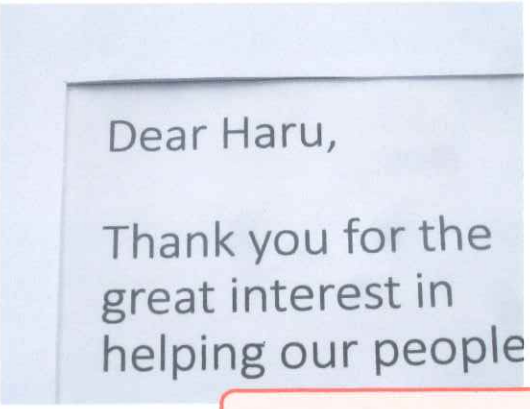
セントルシアに戻り指圧研修センターの資金集めの活動を精力的に行った。その一つが目の不自由な子供たちと一緒に作ったノートブックを関係方面や街頭で販売活動を行い、収益の一部をその資金に充てた。またテレビに視覚障害者協会と一緒に出演し支援を訴えるとともに、在セントルシアの各国大使館にお願いに回った。小・中学校のパソコンは台湾が寄贈したものたが、お願いした翌日には大使夫人が支援金を持参された。

そうしているうちに２年の任期が満了し帰国することになったが、アブリル会長から携帯にメールがきた。機内で読んでみると「これは本当のサヨナラではない。指圧研修センターが実際に稼働するまで一緒にやろう」と書かれており、感謝の気持ちがにじみ出た文章に感極まったのを覚えている。機中で楽しかったことや苦労したことなど、セントルシアでの様々なことを思った。

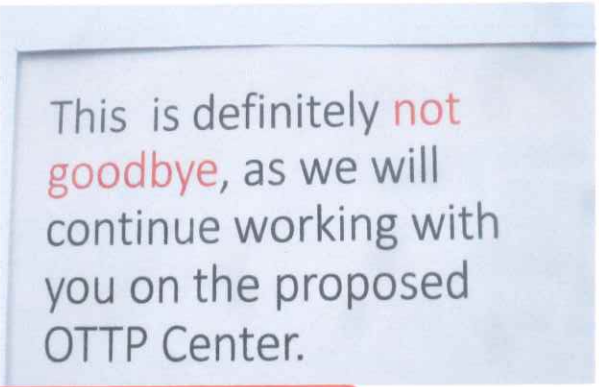
テレビで支援を訴えました

▲ノートブック購入による支援を呼びかけ ▲

▲街頭でのノートブック販売▲


Dear Haru,

Thank you for the great interest in helping our people


This is definitely not goodbye, as we will continue working with you on the proposed OTTP Center.

帰国の機内で読んだ視覚障害者協会からのメール

【カリブの夢について】《指圧研修センター再開と同センター卒業式出席》

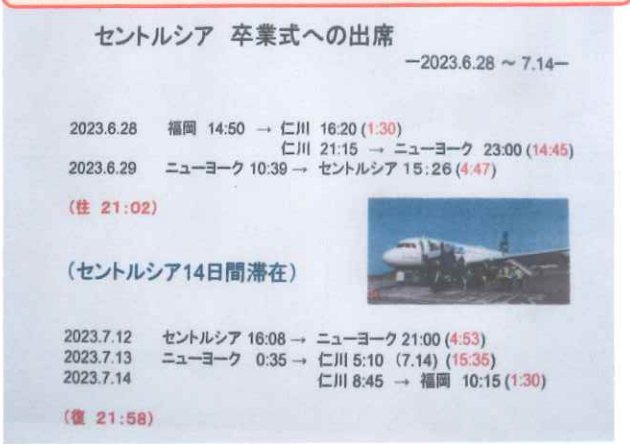
私は２０１８年１０月に帰国。カリブの夢は後任者が引き継ぎ２０２０年１月ついにジャイカボランティアの丸山君や渡辺さんの手で指圧研修センターが一旦スタート。しかし、コロナのため３か月もたずに閉鎖に追い込まれた。その後２０２２年８月、網川先生が奥さんとセントルシアに渡られ、指圧研修センターを再開。

そして、１年間コースで全課程を修了した３名が初めて卒業することとなり、現地から卒業式への招待状が届いた。７月５日(現地日)に開催された卒業式に参加し、ノートブック販売で得た２千ドルを支援金として視覚障害者協会に贈呈した。

卒業式の翌日、身寄りのない人を支援する無料の５分間のデモンストレーションがあったが、今後、お金をもらって指圧を業としていく彼らにとって自信がついたと思う。

このプロジェクトは緒に就いたばかりであるが、巣立った人たちが自立していくことを願うばかりである。

乗り継いで機内で過ごす２２時間



▲卒業式への招待状▲

空港着、歩いて到着口へ

来賓として挨拶中の黒岩氏

▲卒業式を終えて、嬉しさと安堵の笑顔で記念撮影▲

▲卒業式の後、卒業生による指圧のデモンストレーション▲

【終わりに】

ジャイカのシニアボランティアとして初めてのセントルシアで、まさにゼロからのミッションがスタート。異文化に戸惑いながらも日々研究・検討しながら少しずつ形が見える努力をされたんだなぁと、その不屈の頑張りに感銘を受けました。国際貢献と言ってしまえばそれまでですが、カリブの夢が正夢になったことは、セントルシアの目が不自由な人たちにとって希望の光がともったのではないかと思います。

このプロジェクトが軌道に乗って、卒業生が社会で自立して生活できるようになれば、と願わずにはおられません。黒岩氏がまいた種が見事に実ったのです。

黒岩さん、大変お疲れさまでした。参加された皆さん、ありがとうございました。

▲「カリブの夢」物語を終えますが、プロジェクトはこれからも続きます▲

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。セントルシアに思いを馳せていただき、よろしければノートブックの購入についてご検討ください。《筆者》

セントルシア初 指圧師に

「視覚障害者の自立へ一歩」

養成講座発起の男性喜び

本年の9月21日の読売新聞

黒岩氏によれば、セントルシアにはこれまで指圧師という職業はなく、カリブの夢の目的となった指圧研修センターの指圧課程を修了した人が指圧という職業を行うことになります。

参考までに、日本では「あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律」で、その免許を持つ人が業務独占としてあん摩マッサージ指圧等の行為を行える。